



第 1415 回例会報告

平成27年6月4日(木)曇り

会長挨拶

会長 吉澤邦雄

自分を磨く

本日は恒例となりました早朝例会に大勢の皆さんにご出席をいただき有難うございます。

また本年もこうして平福寺さんをお借りして例会を開催できますことに、ご住職様、聖仁会員、そして早朝より色々ご準備をされたご家族の皆様改めて感謝を申し上げます。

ご存知のように我ロータリークラブの掲げる“超我の奉仕”は仏教で云う“利他”の心に相通ずるものがあります。本日は日頃の慌ただしい日常生活を離れ、小林住職様の法話を拝聴する中で、心静かに自分自身を見つめ直し、明日からの生活に、そしてロータリー活動に有意義につなげていただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひし

1415 回例会

早朝例会(外部講師例会.)

クラブ奉仕委員会

本日は恒例の早朝例会でした。清々しい冷気の中、年一回のこの機会は何にも代えがたいひと時でした。平福寺さんには毎年大きなお世話をおかけし心より感謝申し上げます

当日のご住職様のご法話を抜粋いたします

釈尊の教えに学ぶ—四諦(苦集滅道)—

平福寺住職 小林崇仁

人生における様々な苦悩から、いかにしたら離れることができるのか? 2500年前に釈尊はその答えを求めて出家されました。6年間の修行の後、ついにその答えを得て、さとりを開かれました。



釈尊が初めて説法したその内容こそ、「四諦」という考え方です。

四諦(4つの真理・苦集滅道)とは何か

この諦とはあきらめるという意味でなく、真理という意味です。

【苦】 生きることのすべては、苦がつきまとう。

【集】 その苦には、原因がある。

【滅】 その原因は、滅することができる。

【道】 その原因を滅する方法がある。

この流れに沿ってお話を進めます。

【苦】

皆様ご存知の通り苦は、四苦八苦と言われる苦で、「生」「老」「病」「死」と「愛別離苦」「怨憎会苦」「求不得苦」「五蘊盛苦」のことです。この時苦の意味

■出席報告

会員数	38名
出席対象	37名
出席者数	28名
出席率	75.6%
前回修正	91.9%

■ニコニコBOX

12名	20,000円
累計	513,000円
目標額	60万円
達成率	85.5%

■今週のこたば



は「苦しい・つらい」ということでなく「思うようにならない」という意味です。すなわち「生病老死など人の思う通りにはならない」という教えです。

そして苦には原因があり、深くその原因を考えなければならぬと教えています。それが集です。

【集】

苦の原因とは【渴愛】であるとしています。一体苦の生ずるプロセスはどのようなものなのでしょう。そして渴愛とはなんなのでしょう。

【渴愛】とは歓喜を求めて止まない根源的な3つの欲のことで、本能と言いましようか元から人間に備わっているものともいえます。

- ① 刺激を求める、
- ② 生(存続)を求める、
- ③ 死(絶)を求める

心です。①②はお分かりいただけると思いますが③を人間は求めるものでしょうか。少し深く考えると私たちの行動のなかにもこれ(絶)を求める心は結構あるように思えます。

この①②③から生まれてくるのが

【欲望】生理的欲望。性欲、食欲、睡眠欲、生存欲、非生存欲、社会的欲望、財欲、名誉欲、所有欲であり

【執着】欲望の対象にとらわれ、視野が狭くなる。愛着、嫌悪 etc であり

【煩惱】正しい判断を妨げる心の働き、極端な感情。貪り、怒り、etc であり

【悪業】悪い行い。殺、盗、うそ、悪口、うらみ、ねたみ、くやみ、etc です

こうしたことが【苦】の連鎖を生み(思うようにならない連鎖を生み)自分も、周りも不幸に陥れてしまうのです。

【滅】

釈尊は渴愛を滅しました⇒即ちさと、解脱、涅槃、成仏の境地に達しました。

私たちがその境地に達することはすぐには困難だとしても、欲望をひかえ、執着や煩惱から離れ、悪業を起さないことで、苦の連鎖を減らすことはできます。その行いが道です。

【道】

さとりの境地にいくらかでも近づこうとする方法が【中道】と【智慧】と【慈悲】です。

【中道】両極端を離れた、かたよらない生き方・考え方をしなければなりません。

- ① 生き方 頑張り過ぎず、かといって怠けず(豎琴

のたとえ: 豎琴の糸は強すぎれば切れずし弱すぎればよい音を奏でません)

② 考え方 ひとつの考え方を妄信しない多様な価値観を認め合うことが大切です。

【智慧】正しいものの見方

① すべては移り変わるという現実(諸行無常)を良く理解し

② 苦が生ずるプロセス(渴愛→執着→煩惱→悪業→苦)をよく見て、

③ いまの自分の心の状態を見つめ直さなければなりません

【慈悲】分け隔てない優しさ

① 利私欲を捨てた、すべての衆生(しゅじょう・命あるものすべて)への思いやりの心を持ち

② 他人の書びと悲しみを、自分の喜び悲しみと感ずる心をもつ

そうした【智慧】と【慈悲】を磨き、【中道】を歩むようにと、釈尊は説かれました。



智慧も慈悲も誰もが備えているものです。しかし備えていても、すぐにでも、誰でも悟れるものではありませんが、そうした心を失わぬよう、日々清く正しく生きようとすれば【苦】の連鎖からののがれ心安らかな人生が送れるようになると思うのです。

合掌

(文責 河西達雄)



最後はおいしく朝粥をいただきました